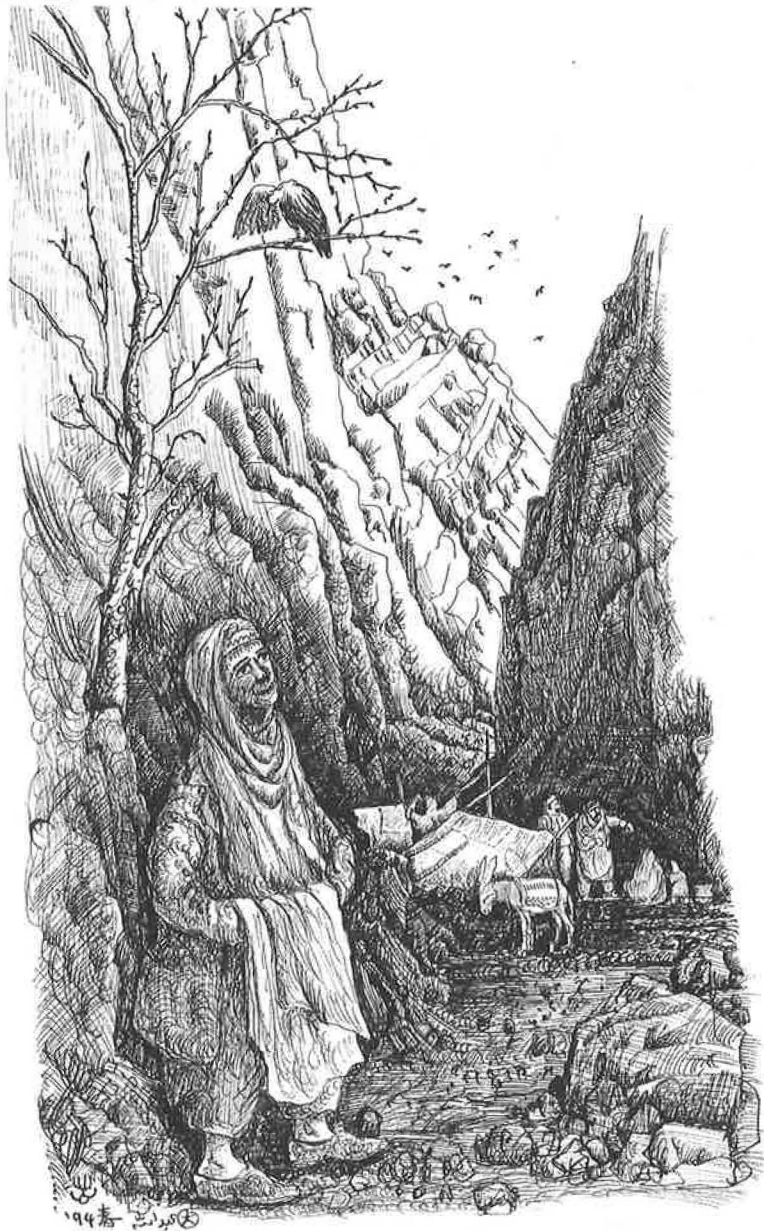


1994年 7 月16日

ペシャワール会報

No.40

ペシャワール会 〒810
一丁目一〇一・二五 福岡市中央区大名
電話・FAX 〇九二(七三二)二三三七二
上村第二ビル三〇七号



●1993年度報告

- | | |
|------------------------------|------|
| ●暗さにこそ灯を、騒乱にこそ平和を..... | 中村 哲 |
| ●周到な準備の必要性を痛感..... | 小林 晃 |
| ●祭りの日のできごと..... | 倉松由子 |
| ●季節はめぐり早や一年..... | 豊崎朝美 |
| ●念願のダラエ・ヌールを訪問2 | 林 達男 |
| ●ヌーリスタンの渓谷(1)〔インダル为国2〕 | 中村 哲 |

国境*表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。
彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

暗きにこそ灯を、騒乱にこそ平和を

1993年度を振り返って

援助とは何か。人間の福祉とは、「進歩発展」とは、「文明」とは、「平等」とは、「幸せ」とは、そして人が生きて死ぬとは、……

静かに、しかし深く、私たちの知るところがあるでしょう。

現地の圧倒的な「光と影」は、これらを直に突きつけます。

JAMS (日本-アフガン医療サービス) 顧問医師 中村 哲

一九九三年度は、ペシャワール会発足十周年にふさわしく、今までにない躍進の年だったと思います。日本側・現地側ともに、文字通り力を尽くしました。JAMS診療数は、九二年度の五万人、九三年度の十万人から、さらに十五万人に達しました。一方、パキスタン北西辺境州のらいセンター(ペシャワール・ミッシオン病院)は、その評価が定着し、らい根絶計画上の無視できない存在となりました。日本側ペシャワール会の活動も、これに比例して、現地予算七千万円に達しました。専従のない小さな地方民間グループが、これだけの活動をこなしたのは奇跡に近いと言えます。

量ばかりが問題ではありません。ヌーリスタンへの進出で、不可能といわれた地域での活動も開始されました。これによって、アフガニスタン無医地区診療は佳境に入りました。アフガン人チームは、本当に困難な山岳住民の同胞の実情に触れることになったのです。これは一つの挑戦だと言えましょう。そこで遭遇する様々の問題——近代以前の世界に近代的医学をもたらすことは、もっと鮮明な形で彼らと私たち自身を問うものとなるでしょう。

援助とは何か。人間の福祉とは、「進歩発展」とは、「文明」とは、「平等」とは、「幸せ」とは、そして人が生きて死ぬとは……静かに、しかし深く、私たちの知るところがあるでしょう。現地の圧倒的な「光と影」は、これらを直に突きつけます。これは、北西辺境州のらいの仕事でも同様です。

この十年は、短くもあり、長くも感ぜられます。多くの苦労や犠牲、多くの喜びや悲しみがありません。

した。多くの仲間たちが協力しました。多くの仲間たちが死にました。しかし、悠然たる氷河のような時の流れ、純白の峰々は、十年前と少しも変わりません。そこでは、人の美しさも醜さも、悲しみも喜びも、悲惨も栄光も、善も悪も、生も死も、暖かく包む何物かがあります。少なくとも私自身は幸せでありました。

ひるがえって日本を見れば、せちがらく騒々しい世の中です。何やらござかしいばかりでインチキ臭いものが多いです。みなが時流に遅れまいと急ぐ中で、虚構が虚構を再生産してゆく気がします。しかし、私たちは変わらぬものにこそ、希望をおきます。私たちが現地と分かち合う、そのことが自分たちにとっても慰めであったことを改めて思わされます。暗きにこそ灯を、騒乱にこそ平和をかかげるべきです。それがまた、アフガン戦争で逝った二百万人の犠牲者、そして数百円の薬代がなくて死んでゆくそれ以上の人々、かれらへのささやかな弔いでもあります。今はそれ以上に思考が進みません。今後が変わらず、何事もなかったかのように私たちの「日本の良心」の事業が続くことを祈ります。

現地の一般情勢

一九九三年度も政情不安とインフレを受けて、事業の遂行は決して楽ではなかった。しかし、アフガニスタン内部の農村では平和が広がり、日本側のペシャワール会の精力的な努力で補給が達成されたことにより、全般的

アフガニスタン国内・主要活動地域



にはJAMSの活動が好調な伸びとなった。パキスタン側のらいセンターは、重要性がますます高まり、州政府のフィールドワークを中心に協力が進んだ。十年を経過した現地事業は、やっと本格的な段階に入った。

パキスタン北西辺境州・ アフガニスタン情勢

パキスタンでは、一九九三年十月の総選挙で再び人民党のベナジール・ブットーが政権をとり、ソ連崩壊後のパキスタンは左右に激しくゆれている。対外的にも、カシミールの住民蜂起、イスラム教徒迫害事件で対インド強硬論が台頭、緊張関係が続いている。しかし、「急激な工業化——高度成長——輸出拡大政策」は一貫して継続され、これに伴うインフレが庶民の生活を圧迫している。投資は安い労働力を求めて北西辺境州にも殺到し、様々な矛盾を生み出している。アフガニスタンと結び付きの強いペシャワール・北西辺境州では、新政権の「中央アジア軽視策」を批判している。

アフガニスタンの首都カブールでは、昨年到现在政争が日常化し、事実上機能する政府は存在しない。しかし、その分だけ地方には平和と安定が広がっていることは、日本で知られぬ現実として強調したい。一九九四年三月現在、戦闘が行われているのはカブール・マザリシャリフおよびその近郊だけで

あり、主要幹線道路を外れると、昔日の内戦の面影はない。

カブールそのものは、一九九四年一月一日、仇敵同士であったイスラム党とドスタム派が連合、権力の中枢にあるマスード派を攻撃、砲撃戦でカブールはほぼ壊滅した。しかし、ほとんどの民衆はこの政争に冷淡であり、地方に至っては自由な自治を楽しんでいるとさえ言いうる。

一九九四年一月の衝突はかつてなく激しいもので、日に多いときで一千発のロケット砲にみまわれ、戦闘機までくりだされた。大半の市民は地方に逃れ、五十―百万人の避難民のうち、約六万人がペシャワールに逃れようとしたが、パキスタン側の国境閉鎖措置に阻まれ、ジャララバードに留まった。これは新政権によるアフガン政策の転換を示すものであった。

二月、これに抗議したアフガン人グループがペシャワールでスクールバス誘拐事件を起こしてパキスタン側に射殺されると、カブールの同情デモがパキスタン大使館を破壊、両国は事実上の国交断絶状態になっている。内戦を通じて続いていた数少ない「公式外交関係」は、これによって殆ど消滅した。

この中でJAMSの国内診療所そのものは安全でも、国境を越える補給は難航を極め、苦心惨憺であったことは伝えておきたい。

北西辺境州らい根絶計画への協力

九三年度はペシャワール・ミッション病院のらい病棟がNWFPの治療センターとして、さらに重要性が高まった。特に、日本人ワーカー（看護婦・理学療法士）の存在によって、女性入院患者は増加し、入院数五百五十五名、昨年度の約一・八倍の伸びで、病棟は多忙を極めていた。フィールドワークへの参加によって、州政府側との協調はさらに進んだ。

フィールドワーク参加の 重要性と病棟管理

具体的には、四年目に入った藤田看護婦がNWFP全体のフィールドに参加し、山村部の困難な地域で女性患者の治療サービス、早期発見活動に協力。現地側の絶大な信頼を獲得した。病院の治療サービスも二年目の倉松理学療法士の参加で、サンダル・ワークシヨップの生産供給も安定してきた。これらの長期ボランティア・ワーカーの存在の意味は大きく、ともすれば対立しがちな各方面のつなぎ役としても重要になっている。

現在、州の登録患者は約七千名いるが、うち女性患者わずか二二%、さらに交通の不便な山岳部に多発するため、ペシャワールまで治療サービスに下りて来る患者は二割に満たない。早期発見活動の要めである家族内検診（とくに女性は男性に顔を見せない）も、

まともに進んでいないのが実情である。ベシヤワール会の協力がいかに重要か、理解できよう。

らい診療の特徴は、関わりが長期にわたるため、患者―医療側との関係が極めて濃密なことである。短期のゆきずりの協力はありえない。ベシヤワール会の人的協力の大部分がここに集中されていることは、「現地理解」の上でも大切な意味をもっている。今後は、これら長期ワーカーたちの働きが、現地のニーズに応える要めとして展開することになる。



山岳地帯にあるワマの部落

ベシヤワール・ミツシヨン病院そのものは、ひとりらい病棟を残して崩壊寸前である。一方、北西辺境州のらい根絶計画を実質的に支えてきたドイツ勢も規模縮小を始め、財政の削減を現実的に実施した。一九九一年に「感染例の消滅」を高らかに謳ったスワト地方では新患者が続出し、大量に送り込んだ「らい診療員」の管理にも手を焼いている。チトラール、モハマンド、デイル、バジヨウルなどの辺境に至っては、殆ど手付かずに近い。

だが、この渦中にあっても、現地で必要不可欠となつたらい病棟が潰れる事態は考えられない。むしろ、ある程度の管理義務をベシヤワール会が受け渡されれば、管理上の欠陥を大いに改善しうる。ベシヤワール会がどう出るかは、病院当局はもちろん、州政府側、マリー・アデレイド・レプロシー・センターも注目している。当方としては、あくまで医療行政の一角を担うという態度を崩さず、将来的に形は変わっても実質的な協力を続けておけば大過ない。

早期発見の努力

一九九三年度は、以上の長期ワーカーの働きに加え、早期発見に役立つ現地語（パシュトゥ語・ペルシア語）カラー・アトラスの出版の準備にとりかかった。これは、現地の全医療関係者を対象としたもので、資料は全て現地で集め、平易な解説を加えて早期の皮膚

症状を理解させ、変形のくる以前に完治させることを期するものである。

この仕事には一九八六年以来らい菌検査技術の向上に協力してきた、松本繁雄技師（邑久光明園）が携わっている。資料収集・整理を今年度以内に完成、来年度内に実現の見通しである。一般に、英語の出版物は氾濫しているが、医師などの専門職以外には理解されず、らいの分野でも先端医療技術のみが突出し、底辺部がますます取り残される傾向にある。この出版物の意味と働きは小さくない。

農村医療計画

ベシヤワールのJAMS本部（病院）を中心に、ドラエ・ヌール、ドラエ・ピーチ、テメルガールの各診療所は診療規模を増し、力をつけた。一九九三年十月からアフガニスタンの最も高地山岳部のヌーリストン（ワマ地方）に診療所の準備が開始され、一九九四年度早々に開設がこぎつけられた。また、マリリアの大流行に対処するフィールドワーク（一九九三年十一月）や、カブール避難民の診療（一九九四年一月）など、動きが更に活発かつ大規模となった。前年度より五四%の伸びをみせ、質量とも向上した。

その他・ドラエ・ヌール診療所の建築は、一九九三年六月に着手、一九九四年四月に完成した。これによって、ドラエ・ヌール渓谷住民のJAMSに対する信頼は不動のものと

なった。

一九九三年度は、総数十五万五千百三十二名の患者が診療を受けた。殆どマラリア・腸チフス・結核・らい・寄生虫疾患などの感染症、栄養障害、皮膚疾患、外傷（小外科）である。内訳は表1のとおり…

ワーカー派遣事業

一九九三年度は表2にある人々がペシャワール会を通して派遣され、現地事業に貢献した。

九三年度の特徴は、いずれも長期にわたる関わりの者で、例年になく安定した人的協力となった。彼らの大切な役割については、各報告を参照。現地と日本との連絡・複雑な事務会計処理は、豊崎氏の常駐で極めて機能的になった。

一九九四年度の事業計画

1 ヌーリスタン・ワマ診療所の開設

ヌーリスタン・ワマ溪谷は、ヒンズークッシュ山脈の最深部に当たる。地区の人口約千五百戸（約一万人）、同地点から一日往復で診療所に来うる領域を含めれば、その二倍以上に恩恵を与えることになる。

一九九四年三月から既に物資の搬送を始め、一九九四年四月十日に診療を開始した。ヌー

リスタンはアフガニスタンでも比較的らいの多発する地域であり、ワマのJAMS診療所は最高地の医療施設となる。自動車による輸送は不可能で、アフガン人・チームは世界でも最も困難な地域に踏み込んだ。既に医師一名を含む十二名が着任、診療態勢を充実しつつある。

一九九四年度の予定は、外来一日平均六十一八十名程度にとどめ、小外科・骨折などを含む、全体的な臨床技術の向上に努めさせる。これを以て、JAMSの山岳部無医地区の診療計画は、越えるべき一つのピークを目指していると考えて差し支えない。

2 移動診療班の組織化・マラリア診療

昨年度に大流行で窮地に陥った悪性マラリア・カプール避難民緊急支援の教訓で、フイルド診療の重要性が痛感された。今年度は原則として緊急避難民支援は行わないが、悪性マラリアの定期的流行は予想される。夏季から秋季にかけて、診療所周辺の限定された地区で、チーム編成を行って備える。

3 北西辺境州フイルドワークの拡大とらいセンターの再組織化

ペシャワール・ミッシン病院とドイツ救援団体 (Marie-Alexandre Leprosy Centre) の情勢が流動化しているが、らいセンターの存在は安定している。長期的展望でワーカーの

ビザや公式性にとらわれぬ実質性を考慮すると、法的には、あくまでパキスタン民間医療団体の傘下に留まらねば良い安定した協力ができない。日本側でややもすればパキスタン側の活動が伝わりにくい。しかし、これは出発点としても、アフガニスタンの事業の実績性からも重要であり、十分考慮されねばならない。九四年度には思い切った再組織化の可能性が強い。



一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワール・ミッシン病院に赴任。

らいのコントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わると共に一九八六年JAMS（ジャバン・アフガン・医療サービス）を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創設をめざしつつ現在に至る。現在JAMSは一つの病院と四つの診療所を設置して、アフガン人の無料診療にあたっている。著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』（石風社）『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）『ペシャワールからの報告』（河合文化研究所）がある。

1993年度診療実績(表1)

外来診療総数	133,049名	総検査数98,676件
ベシヤワール診療所	48,584	48,071
テメルガール診療所	12,202	10,230
ダラエ・ヌール診療所	47,205	23,772
ダラエ・ピーチ診療所	25,058	16,603

巡回診療総数(移動診療班) 8,601名 約600(記録なし)

ベシヤワール・外来以外診療総数 13,482名

妊婦・母親教室	8,629
鍼灸治療	2,933
手術数	348
歯科治療	837
入院治療数	735

検査内容の内訳	*血液一般	便検査	尿検査	らい菌	その他	総計
ベシヤワール	7,156	11,621	10,430	322	18,542**	48,071
テメルガール	3,557	2,941	3,553	179	0	10,230
ダラエ・ヌール	10,350	5,271	7,414		737	23,772
ダラエ・ピーチ	6,117	5,577	4,117		732	16,603
移動診療班	(約600***)					
総計	27,180	25,410	25,574	501	20,011	98,676

* 血液一般は、マラリア原虫検査をルーチンに含む。

** ベシヤワール診療所「その他」の内訳

X線単純写・造影	5,190	肝機能など血清学的検査	4,315
腹部エコー	2,389	胃・食道内視鏡	1,076
心電図	2,589	病理組織診断	105
脳波	7	その他	2,871

*** 移動診療班のものは主にマラリア原虫検査だが、正確な記録なし。統計には含まず。

1993年度派遣ワーカー(表2)

氏名	職種	所属	協力機関
藤田千代子	看護婦	元福岡徳洲会病院	1990年9月-現在
倉松 由子	理学療法士	元多摩全生園	1992年10月-現在
豊崎 朝美	事務	ベシヤワール会	1993年4月-現在
林 達雄	放射線技師・鍼灸士	元新光園	1992年9月-1994年1月
松本 繁雄	検査技師	邑久光明園	1993年9月-現在(定期滞在)

●1993年度中に 寄付をいただいた団体

西南幼稚園
 松原こひつじ幼稚園
 広島三育学院幼稚園、小学校
 西南学院中学
 八幡工業高校
 西南学院高校インターアクトクラブ
 東福岡高校
 九州国際大学付属高校女子部
 熊本マリスト学園インターアクトクラブ
 西南女学院短期大学
 九州大学校の実会
 久留米大学法学部古賀ゼミ
 西南学院
 福岡女学院同窓会短大部会
 加古川市看護専門学校
 紅梅会
 西南学院中学校母の会
 西南学院高校後援会母の会
 福岡高校同窓会
 熊本ペシャワール会
 八尾ペシャワール会
 風の学校
 人間いきいき研究会
 勝手に支援会
 牛乳パック回収を広める会
 オルタナティブ研究会
 むなかた自由大学
 うら梅の郷会
 月の美術館
 アジア友の会
 アジアを考える会北九州
 中村医師の医療を応援する会
 国際ソロブチスト福岡南
 国際ソロブチスト北九州西
 福岡県田ライオンズクラブ
 名古屋サウスライオンズクラブ
 福岡ロータリーアクトクラブ
 福岡鶴城ライオンズクラブ
 国際ソロブチスト福岡東
 天心堂へつぎ病院
 徳洲会野崎病院
 熊本地域医療センター
 脳神経外科河井病院
 新栄病院
 九州厚生年金病院
 馬場病院とBBコンベ
 村瀬医院
 青洲会病院
 馬場病院互助会
 油山病院
 徳洲会JAMSの会
 天神聖書集
 福岡ベタニア村伝導所
 東八幡キリスト教会
 尼崎バプテスト教会
 熊本YWCA
 大牟田正山町教会
 大名町カトリック教会
 香住ヶ丘バプテスト教会
 聖ピンセンシオ・ア・パウロ会
 小倉教会
 福岡聖書研究会
 佐賀めぐみ伝導教会
 平尾バプテスト教会
 在日大韓基督福岡中央教会
 日本基督教団津屋崎教会
 日本聖公会福岡教会
 福岡筑紫野伝導教会
 福岡キリスト教女子青年会
 鳥栖キリスト教会婦人会
 西南学院バプテスト教会
 労務システムコンサル
 埼玉医療生活協同組合
 (株)九州産機
 サロンドしづや
 九州労災労組青年婦人部
 ししのこキャンプ
 (株)ケンウッド
 グリーンコープ南地方オルタナティブ研
 富士通労組
 国際ソロブチスト日田
 若松中央ロータリークラブ
 福岡西ロータリークラブ
 ケーブルテレビジョン21
 国際開発救済財団
 西日本銀行国際財団
 ハルバーザ
 救市女性問題対策懇話会
 システム開発(株)
 島嶼調剤薬局

●1993年度ペシャワール会会計報告

一般会計	
[収入の部]	
1. 会費及び寄付①	42,357,032
2. 団体指定寄付②	6,391,500
3. 事業収入等 ③	400,000
4. 利息雑収入	239,566
計	49,388,098
前年繰越	6,959,617
合計	56,347,715
[支出の部]	
1. 現地活動費	38,879,039
1) JAMS等運営費④	36,844,472
2) 渡航通信費 ⑤	1,245,533
3) 国内活動費 ⑥	789,034
2. 広報費	1,905,070
3. 事務局費	3,292,557
計	44,076,666
次年度繰越	12,271,049
合計	56,347,715

特別会計

I 外務省NGO補助事業 JAMS運営、緊急診療合計

[収入の部]	
1. 外務省NGO補助金	11,320,000
計	11,320,000
[支出の部]	
1. JAMS本部運営	10,000,000
2. 緊急診療医薬品費	1,320,000
計	11,320,000

II 国際ボランティア貯金配分事業

[収入の部]	
1. 国際ボランティア貯金配分金	19,638,000
計	19,638,000
[支出の部]	
1. アフガン内診療所運営	19,638,000
計	19,638,000

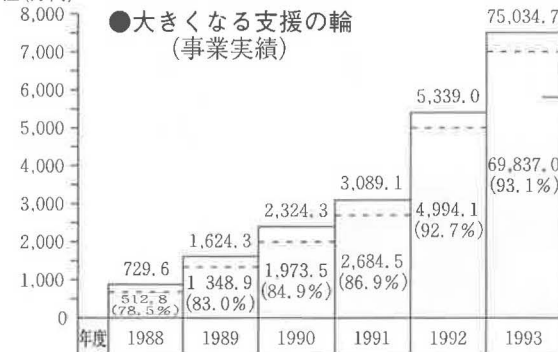
III マラリアキャンペーン (11月9日～3月31日)

[収入の部]	
1. 個人 1,895件	14,548,624
2. 団体 144件	5,937,083
計 2,039件	20,485,707
[支出の部]	
1. マラリア診療薬剤費	2,686,270
計	2,686,270
次年度繰越	17,799,437

*繰越金については、「マラリア基金」として積み立て、今後5年を目途にJAMSにおける感染症診療に役立てて行きます。

単位(万円)

●大きくなる支援の輪 (事業実績)

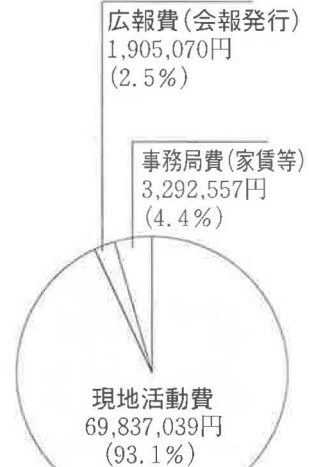


個人会費件数	699	685	1,097	1,322	2,202	2,722
団体寄付件数	30	55	91	98	114	159

'93年度会計報告

- ①個人三三件、団体二五件
- ②二団体による助成金
- ③書籍、絨毯売却
- ④医薬品、医療機器、JAMS運営費、ミッション病院助成
- ⑤スタッフ渡航費、国際電話
- ⑥国内研修費用、講演旅費等

●1993年度事業額 (支出ベース) 75,034,666円



●胃カメラの指導に赴いて

周到な準備の必要性を痛感

神戸市立中央市民病院医師 小林 晃

＊五年ぶりのミッシヨン病院

一九九三年二月、訪れたペシャワールの町

はやたらに車が多くなっていた。しかし、オールドバザールに行き、チャイを飲みながら人々の営みをみていると五年前、いや恐らく中世の頃と殆ど変わっていないかった。以前泊まったあの悪名高きカイバルホテルに宿をとろうとしたが、残念ながら近代的なホテルに変わってしまった。しかし、隣の土産物屋を経営するアフガン難民のおじさんは私のことをしっかりと覚えていてくれた。私は何故かまたこのペシャワールに来てしまった。

学生時代は「インド病」という病気にかかり、幸せの青い鳥を求めて休みになればアジアの国々を放浪していた。アジアの旅は、温室のような日本という先進国の平凡な家庭で育った私の心に強烈な印象を与えた。そのためか将来、漠然とではあるが機会があればアジアで医療活動してみたいと思っていた。

医学部を卒業した春に、ペシャワールでいろいろの診療をしている先生がいると聞き、連絡

もせずに会いに出かけた。当時はソ連軍のアフガニスタンからの撤退で、世界中より大勢のジャーナリストが集まっていた。

当時のカイバルホテルはヒッピーのたむろする安宿だった。幸い、宿の主人は中村先生の居所を知っていた。ミッシヨン病院を訪れ、門衛の人にらい病棟に案内してもらった。そこに、手入れもせず汚い口髭をたくわえ、現地語らしき言葉で何やら話している人がいた。彼に中村先生の居所を聞くと、その人が中村先生であった。

その頃先生は、原因不明の黄疸で疲れていたようだった。後に、出血性黄疸レプトスピラ症と自分で診断したと聞いた。しかし、何者か分からぬ私を親切にらい病棟に案内してくれた。中世におけるらい病人の迫害や「砂の器」にでてくるようならいの陰惨なイメージを想像し、緊張して病室に入った。しかし、意外にも患者さん達は明るく、指の殆どない手で握手を求め、歓迎してくれた。どこからかチャイを用意してくれ、馳走になった。

その春はなんとか医者になることができ、

忙しさのうちに五年間が過ぎていった。

大阪の八尾で、ペシャワール会の集会有り、中村先生と再会した。話を聞くうちに何とか再びペシャワールに行きたいと思った。しかし、当然ながら実際の診療という形では私の実力では不可能であった。そこで胃カメラの指導という名目で無理をお願いしたところ快諾してくださった。しかし、同僚の医師が病に倒れたりしたため、二度にわたり、出発は延期となった。

五年ぶりにミッシヨン病院を訪れた。そこでは長谷川医師が、孤軍奮闘していた中村先生が二日後に、ミッシヨン病院に着かれた。スタッフ達と再会の挨拶と抱擁が交わされた。それが済むと患者さんたちは、待ち構えていたように、中村先生のもとへ駆け寄り、再び長々と再会の挨拶および抱擁が交わされた。患者さんたちは久しぶりに中村先生に会い、本当に嬉しそうであった。中村先生がミッシヨン病院の玄関から診察室までの約十メートルを進むのに一時間ほどかかったように思える。イスラム社会では、挨拶が重要な位置をしめる。やっと診察室で中村先生にお会いすることができ、簡単に挨拶をした。五年前と違って中村先生は元気そうであった。

＊押してもダメなら引いてみな

私の仕事は、JAMSの院長であるシャワリ先生を始め、二人の医師に、胃カメラの指

導をすることであった。胃カメラはもともと JAMS にあったが、ほとんど使われていなかったようである。しかし、保存状態はすこぶるよかった。イスラムの社会では、インシャラー(すべて神のなすがままに)という言葉がある。しかしシャワリ先生はなかなか慎重である。胃カメラの合併症、洗浄方法などを詳細に私に質問した。少なくとも胃カメラが感染源となることだけは避けるため日本と同様の消毒を行おうと考えていた。幸い日本でも使用している「サイデックス」という消毒薬が現地でも安価で購入することができた。

しかし、水の関係からか緩衝剤がうまく溶けなかった。慎重なシャワリ先生が消毒の際に胃カメラの送気孔が詰まる恐れはないかと私にいった。しかし大雑把である私は、「ノープロブレム」といって消毒を始めた。果たして送気孔は詰まってしまった。日本であれば直ちに業者の人がきて直してくれるが、ここはペシャワールである。国際電話をかけ、オリンパスの本社に相談したがうまくいかなかった。あれこれ悩んでいるときに、突然シャワリ先生が送気孔を自分の口で吸いはじめた。すると送気孔の詰まりを解除することができた。日本式にいうと、押しでも駄目なら引いてみなということであろうか。何とか直すことができ、検査を始めることができた。

途中ラマザン(断食月)にはいったため症例数が減った。というのは胃カメラをするということとはラマザンを破ることになるからで

ある。もちろん病人はラマザンを破ってもいいことになっているのであるが。ラマザンのため昼以降はスタッフも空腹のため仕事にならず、私も暇になった。しかし、ここはイスラム社会であり、日本的せつかち主義は通用しない。私も彼らと同様、「白雲悠々去りまた来る。また来しからずや」という心境でがんばりと過ごした。短い期間であったが、皆さんの熱意もあり、何とかスタッフだけで、胃カメラができるように指導できた。

※私は何をしたのだろう

患者さんにとつても、胃カメラは初めての人が殆どである。しかし、案外にも恐れることなく胃カメラを受けてくれた。上腹部痛の患者を中心に十代から七十代にいたる七十八人に行った。そのうち正常三十一例、十二指腸潰瘍二十一例、胃炎十四例、逆流性食道炎四例、胃潰瘍二例、食道癌二例、胃癌一例、その他三例であった。十二指腸潰瘍が意外にも多いのには驚いた。シャワリ先生は「ロシアからの贈り物」と言っておられた。ある十二指腸潰瘍の患者は戦争によって自分の肉親を失い、カブールの家は焼かれてしまったと言っていた。食道進行癌の患者に関しては見つけたのはいいが、先進国で行われているような放射線治療など、もちろん JAMS で行うことはできない。へたに治療法などを教えると、家族を大切にしている患者の家族は、一家の財産をなげうってでも一時的な効果しか認め

めない治療に走る事になりかねない。

果たして胃カメラというものが、ペシャワールでどれだけ役に立つのか。ふと考えてみると淋しい気がした。私は結局、ペシャワールで何をしたのであるうか。

※日本にも困っている人はいる

今回、私がペシャワールへ行くにあたって批判的な意見を持つ人が多いのには驚いた。「日本にも困っている人はたくさんいるのよ」と言う人もいた。自然淘汰と適応の原理、或いは世界の人口問題を掲げて医療活動の不要論を唱え、反対する人もいた。

先日、中村先生のかかれた『ドラエニールへの道』という本をよんだ。終章のところ「アフガニスタンのヌーリスタンにおける一人当たりのエネルギー消費量は、先進諸国の数万から数十万分の一に過ぎない。世界を破壊に導くのが、人口爆発そのものよりそれによってくる消費と自然破壊だとすれば、極端に質素な生活形態を守り続ける山岳住民数万の命は、先進国の住民一人分の害も及ばさない。」と書かれていた。また中村先生はあるテレビ番組で世界の環境、人口問題を問われ、その解決策として、「先進諸国民の半分でも地球上から消えてもらうのが手っ取り早い」というような冗談をのべ、冗談の分からぬ聴衆からひんしゆくをかったそう。

＊中途半端な気持ちではダメ

実際医療活動を行うとすると、最初は現地を愛する気持ちがあれば何とかなるものと思っていた。しかし、実際に現地に行ってみるとそんなに簡単なものでないということに気付いた。まず、当然ながら言葉の問題である。こちらでは、英語はもちろん、パキスタンの国語であるウルドゥー語、北西辺境州のバシユトウー語、さらにアフガニスタンの国語であるペルシャ語も必要である。外来を見学させてもらうと、当然ながら、あらゆる訴えを



JAMSのスタッフとくつろぐ小林医師

もった患者が来院する。患者さんから信頼されるためには、外科、内科はもちろん皮膚科、眼科も含めて勉強する必要がある。

中村先生は、専門は神経科であるが、こちらで医療をするために、熱帯医学はもちろん、外科も学ばれ、らいに關しては韓国で勉強し、結核の専門施設にもいかれて勉強された。

パキスタン政府や州との複雑な交渉も必要である。イスラム社会における人間関係はとても複雑であり、社交的な人間でないとしてもやっていけない。日本人にありがちな自分の世界に閉じこもり、周囲の人に挨拶もできないと敵意があるととられる。ある時は極めて常識的なところも必要である。

学生時代の友人、或いは病院の同僚のなかでアジアの医療をやると同じ志を持つ人間はたくさんいた。しかしフランス等、欧米諸国と違い日本の医師がたとえ医療援助のためとはいえ、長期の休みをとり、医療活動を行うことは難しい。また、年を取り、結婚したりすると現実の問題があるのか、実際に行動に移す人はなかなかでてこない。

短期間であるが、実際ペシャワールに行き、現地をみて、中村先生に会って話を聞くことができた。そこで感じたことはアジアで医療活動を行うということである。現地を愛する心は当然のことであり、それに対しての周回準備が必要である。また、極めて常識的なところも必要である。さらに、中村先生がそ

の本に書かれているように、腕の一本でも賭けるぐらいの気持ちがないとできないと思うた。

実際自分にそこまでの気持ちがあるののか。今後ゆっくりと自分の心に問う必要がある。

＊発展・剰国の人間として

もちろん今回の私のように現地が必要とすれば、短期間の技術指導という形で参加する方法もある。役に立つ立たないは別に、発展・剰国で疲れた心の洗濯にはなると思う。今回の胃カメラの指導という形での短期間の滞在は果たして現地で役に立ったかどうかはわからない。しかし、少なくとも私にとって、日本という発展・剰国で鈍磨した感覚の錆び落としにはなった。アラール（神）に免じてお許しいただきたい。

一人の人間がペシャワールに行くにあたり、ビザをとったり、住居を決めたりするのにペシャワール会のスタッフの皆様は、大変な労力を費やされています。にもかかわらず、こちらの都合で、私のペシャワール行きは二度も延期となりました。しかし、根気よく私の我儘のために骨を折ってくださいました、中村先生をはじめ、ペシャワール会の皆様、JAMSのスタッフの皆様は心から感謝します。

（ペシャワール滞在時は庄内余目病院勤務）

祭りの日のびびり

ミッシヨン病院理学療法士 倉松由子

＊地方によって異なる暦

五月二十一日から二十三日は今年のペシャワールのイードウル・アズハ（犠牲祭り）のお祝いの日でした。

これは旧約聖書に出てくるアブラハムが息子イサクを神に捧げようとしたことにちなんだもので（イスラムの聖典と聖書には重複しているところがある）、イスラム暦の巡礼月（メッカにお参りする月）の十日から十三日にかけて祝われます。

イスラム暦は太陰暦で、毎年太陽暦から十日くらいずれていきます。またパキスタンとアフガニスタン、パキスタンでもペシャワールとイスラマバードでは暦に少しずずれがあるので、「今年のペシャワールでは：」と前置きしたのです。

＊祭りを家で祝う患者さんたち

このイードウル・アズハと断食月（ラマザン）明けのイードウル・フィトルとが年二回の一番大きなお祭りの日で、簡単にイード

ともいい日本のお正月みたいなものです。

この間、商店はいっせいに休業し、町はがらんとして、田舎から出てきている人達は故郷に帰って、皆家で家族と共にすごします。

イードのために晴れ着を新調したり子供に新しい靴を買ってやったりするのでイードの前は一時的に物価が上がったりします。

犠牲祭りではその故事に因んで各家庭でいっせいに羊や山羊、牛などを犠牲として屠ります。その肉でご馳走を作って食べ、また、貧しい人達へおすそわけをするのです。

ミッシヨン病院のらい病棟でもイードが近づくと、患者さんがどんどん退院していきました。残ったのはよほど傷が深い、らい反応の症状が重い人達でした。こういう人達でも自宅がペシャワール近辺だとどうしても家でイードをすごしたいというので病棟のスタッフは傷の保護・除圧のためのギプスを巻いたり、外泊分の薬を持たせたりして、三日から一週間くらい帰宅しても差し支えないよう対応しました。

イードの前の日の夕方、両足が腫れている

おじいさんを調べていたとき、その人が「明日からイードだから、休むのか」と尋ねるので「いや、病院に出てきて仕事をやるよ」と答えたら、「そうか、あんたの家は遠い遠い日本だからなあ。俺の家もペシャワールからは遠いデイルにあるんだ。お互いイードでも家には帰れなくて、ここで過ごすしかないだね」というようなことを慰め顔でいました。このイードという言葉を正月に置き換えたなら日本人にも感覚がわかるでしょう。

＊アフガン人の青年とおじさん

イードの間も病院に残っていた患者さん達の中に、アフガンからの人も二、三人いました。一人はベルシャ語しかわからない二十歳前の男の子で心細さがつのつたのか退院したいと言いました。彼の足には重い傷があつて、今退院したらどんな悪い結果になるかわかりません。パシュトゥン人のスタッフが荒っぽい言い方で「こんでもない。今でいいたら足がなくなってしまうか、いや命だつてなくなってしまうかもしれない。おまえ、死んでしまふぞ」と身ぶり手ぶりよろしく大声でどなりました（これは彼の身ぶり手ぶりから大体の意味がわかったのです）。その子はしゅんとなって思い止まったようでしたが、間にたつて通訳をしていたやはりアフガンからのおじさんが、後で「この子は戦闘の激しいカーブルから来たんだ。家族は父親一人しか残っていないそうだ。日々回りで人が



募 集

ペシャワール発

「共に歩む」ワーカーを!!

JAMSとミッション・ホスピタルでは日本からのワーカーを募集しております。ただし、現地は熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々の便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象:

1. 医療技術者(医師、看護婦(士)、検査技師、理学療法士など)。又は事務関係者で外国語(英語又は現地語)の堪能な者。
2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、日常英会話ができる者。

② ワーカーは、現地で1カ月、ペルシャ語またはパシュトゥン語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をしていただきます。

③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを支給します。

④ 目的を持った見学であれば拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。(繁忙期には断ることもあります)
詳しくは、ペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810 福岡市中央区大名1-10-25
上村第2ビル307号 ペシャワール会
電話 092-731-2372
092-725-3440【分室】

死んだり、傷ついたりする中で暮らしてきたんだ。そういうこの子にむかってあんな言い方があるもんか。どんなに気落ちすることか。多分こういうようなことを憤慨して私に訴えました(私にわかったのは傍線部分の単語だけで、実はそのおじさんは長々ともつと話したのです)。

そして、「どうか、あの子のベッドを俺のとなりに移させてくれ。そうしたら俺がよく面倒を見てやるから」と言いました。

※敬けんな女性信者の素顔

女性の患者さんで残った三人のうち一人はアフマンドという部族自治区(パキスタン国の法律が適用されず部族の掟による自治地域)からきたおばあさんでした。両手の熱傷の治療と白内障の手術のためにきた人です。毎日熱心にお祈りし、普通の会話の中にも

コーランの章句をはさんで話をするので言葉がよくわからないながらも敬けんなイスラム教徒だと思っていました。

彼女は他人を呼ぶときたいい「やい子供」と言います。日本人の女性スタッフには「ジスタービビ」(ビビは女性の敬称)とか「美しい子供」などと言っていました。あるとき彼女に呼ばれても他の患者と話しててなかなか手があかなかったとき、「クス・ビビ」と言いました(つまり「×××××ねえちゃん」とでもいいましょうか。×××××は特に秘す)。敬けんな信者さんはこういう言葉は口にしないものだと思っていたのでびっくりしてしまいました。

※祭りのおすそわけ

イードがあけると、一時退院の患者さんたちが戻ってきました。一人の女性性は自分の家

では羊を二頭屠ったと言って、女性の患者とスタッフのために二日前に殺した羊の生肉を持ってきました。また、ある男性患者は病棟で使うようにと一升瓶一杯の自家製菜種油を持ってきてくれました。病棟で使うオイルマッサージ用の菜種油が切れていて、私が手足の運動訓練時にけちっていたのを他の患者から聞いたのかもしれない。

ウルドゥー語もまだよくできない私は、パシュトゥン語はほとんどわかりません。でも患者さん達はとても率直に感情をあらわすし、パシュトゥン語では単刀直入に物を言い、また自分の言いたいことは何度も繰り返して強調するのでなんとなくわかるような気がする時があります。

もっと言葉の勉強をせねばとおもいつつも日中の気温が四十度を越える季節柄、それもままならず……という今日この頃です。

季節はめぐり早や一年

JAMS 事務担当

豊崎朝美

ピンクや白の小さな花から甘い匂いを撒き散らしていたスウィートピーが終わり、薔薇が咲き溢れる近くで、空に向かって何本もの腕をのばしている大きなサボテン（3メートルぐらいある）がたくさんの黄色い花を今にもほころばせようとしている、そんな家の庭を見ていると、去年、私がペシャワールに来た時と同じ季節がまた巡って来たことに気づかれました。来たばかりの頃は、私の回りにある全ての物が珍しくて戸惑いながらも好奇心を押さえきれず、キョロキョロしていました。

□スカートのない街、ペシャワール

例えば衣類、一般に男性、女性ともに着られているのは、シャルワルカミーズと呼ばれるもので、膝下までの長さの上着に、だぼとしたパンツと言うスタイルで、日本からきたばかりの私にとって、異国を強く感じさせる物の一つでした。イスラマバード、カラチ、ラホール等の大都市では、外国人女性がスカートにブラウスというスタイルでも殆ど問題ないようです。現地の飛んでいる女性

でミニスカートを着ている女性を一度見かけたことがあります。でもここペシャワールでは外国人でさえスカート姿を見かけることはまれで、女性は常にドパタと呼ばれるスカートを頭から覆い、外出する時は外出用の大きなドパタで髪、体、顔をすっぽり覆います。あるいはブルカと呼ばれる目の部分だけ網の目になっている物で全体を隠します。しかし、大都市では、ドパタは肩に掛けるだけで、顔をだして歩いても問題が無く、ファツシヨンの一部になっています。

□マントウはアフガンぎょうざ

また食事でも来たばかりの頃は興味を強く引かれた物の一つでした。一般的にパキスタン料理は香辛料がきいていて辛く、アフガニスタンの料理はあっさりしています。しかし両方とも油をたっぷり使っていて表面がギトギトしています。（こちらでは、油をたっぷり使って表面が油でテラテラ光っているように見える方がおいしそうに感じるそうです。目玉焼きの上に二センチぐらい油がかかって



車が増えたペシャワール市内

いたと言う話も聞いたことがあります。）一般によく食べられているのは、ナン（小麦粉を練って焼いたもの）とシチューみたいな煮込み料理（野菜だけとか、豆が入っていたり、肉が入っていたりします）、肉片（主に羊）を棒に突き刺して焼いたカバブ、肉をトマトとタマネギで炒め煮して、マサラ（香辛料）で味付けしたカライ、色々な野菜や魚を衣を付けて揚げたバコーラ（テンブラみたいな物）だけど、味はやっぱりこっち風、ハンバー



JAMSの中庭で順番を待つ患者さん

□言葉の問題は大きい？ 小さい？

こういったペシャワールでの生活は一年経った今、私にとって特別珍しいものではなくなりつつあります。ここで生活するのにごく

グミみたいなチャブリカバブ、サモサ、チキンマサラ……等々。そうそうマントウと言う料理があつてアフガニスタン風ぎょうざと言ったところ。また、ご飯とか鳥肉は御馳走でお祝いの時によくだされます。お茶もパキスタンとアフガニスタンでは違います。パキスタンのお茶は紅茶にミルクと砂糖が入っていて、アフガニスタンのお茶は緑茶に砂糖で、時にはカルダモンが入っていて何とも言えないいい香りです。

身近な物、ごく日常的なものとして、私の中に入り込んできているようです。しかし生活習慣、言葉（ペルシャ語）の面ではまだまだで、特に言葉の課題と言えば、これは大変です。パキスタンでの公用語は英語とウルドゥ語だけど、ペシャワールでは英語やウルドゥ語よりパシュトゥン語の方が一般的に話されています。また私のいるJAMSのスタッフは全員アフガン人でペルシャ語かパシュトゥン語を話します。このパシュトゥン語は世界の言語の中でも最も習得の難しい言語の一つだといわれていて、それでパシュトゥン語に較べたら簡単なペルシャ語を独学しているけど、仕事上のことは英語でほとんど問題がないし、家に帰れば日本語、といった環境ではなかなか伸びません。

こういった多言語のなかで生活していたら、言葉が解らないことは生活するのにそれほど大きな問題ではないんじゃないかと、ペルシャ語がなかなか伸びない私は自分に対して、何時も言い訳をしています。

*表紙をめぐる小さな物語 3

甲斐大策

国境

隣国の都合で、ある日突然国境が立ちはだかる。

「アガ兄、あいつまた唄ってる。狂ったんじゃないか。」

「オレだって狂いたいよ。さつき岩陰でムウタイ（剣の柄）シゴいてたんで殴りつけてやった。まったく……」

「じゃ今朝、兄貴はなんでオレを殴った？」

「お前が大丈夫ってから来てみりやこれだ、バカ野郎！ 国連の外人ににやにやして、私達の認めてない国境です、胸を張って通れまうから……」だど。大学までやってロクなこたあねえ。外人相手にはすぐ進んだふうのことって恰好つけやがって。アメリカにサーヴィスのせりふか！ 初めっからお前だつて、国境のことなんぞ何も判ってねえんだらうが……。そうだら、ええ？ 国境って何だ！」

アジ一族二〇人、国境近くの谷に足止めされて六日目である。末弟のアリは唄ってばかりいた。

「アイ、ああその黒耀石の瞳から湧く泉、私の心に満ちて息を詰めるよ。アイアイアイ……」

近くの木にとまっている鳩に似た鳥が放屁した。

念願のダラエ・ヌールを訪問 2

JAMS放射線技師 林 達男

□丸太橋のむこうにクリニックが……

途中、小さな村落を通過しました。その村落の中にも一間間口のバザールが見えます。商品もわずかのようです。これで商売になるのかなと心配になりますが、それは日本人的な発想なのでしょう。

本道より入って川に沿って二時間ぐらい走りましたが橋が二つぐらいしかありません。それも車が通れるような橋ではなく、人だけが渡れるような橋です。

しばらくしてドクターシャワリが「ああ着いた。林さん、あの山の麓がダラエピーチだ」と言いました。しかし、やっと着いたと思ってもそれから二十分ぐらい走ります。谷が開けて遠見がきくところにきました。はるか前方に三本のひのきの木が見えてきました。「あの家がダラエピーチクリニックだ」とドクターは自慢顔です。なるほど見事な屋敷です。それもやはり川向こうです。橋があるのかなと思っていましたら、何と、大きな丸太を四本組んだ仮の橋です。そのすぐ上流には素晴

らしい橋ができてつあります。ドクターは「あれはアメリカの支援でできる橋で、その向こうに日本のペシャワール会のクリニックがあるんだ。はははははは。」と笑っていました。

□谷間の夕暮は早い

近くまで行くとスタッフ一同が迎えにきていました。若いドクターをはじめ検査技師、看護士らが笑顔で待っています。こんな山奥で一ヶ月の間の、よく勤務してくれたものです。ご苦労様でしたと労をねぎらいたくになります。すでに時間は十七時ちかくなっています。

懐かしい顔のチョキダール(門番)が、「林、よく来た、よく来た」と大歓迎です。「疲れたろう。早くお茶を飲め、キャンデイーを食べろ」と総攻撃です。こんな山奥でキャンデイーにありつくとは思いませんでした。

しかし、ゆっくりお茶を飲む時間はありません。谷間の夕暮れは早いので、明るいうちに周囲の風景や施設をカメラに治めなければなりません。明日の出発も早いのです。

そうこうするうちに辺りは夕暮れです。二百メートルも歩けば溪流があります。その向こうは二、三百メートルぐらいの高い石山です。クリニックの裏も同じく石山です。こちらにはまばらに木が生えています。北から南に谷が流れて、これよりさらに奥にも人が住んでいるそうです。この診療所も本道から相当入ったところですが、それよりさらに奥のほうにも人が住んでいることに驚きました。

□先見の明に感服

一夜明けた朝、まだ薄明りの六時半頃には門扉の外には三十名位の患者さんたちが壁にそってかがんで待っています。左側は男性。右側は隠れるように女性が待っています。男性の中には若者がいてカラシニコフを肩にかけているものもいます。七時に順番に整理券を渡し、受付をすますと、どことなくいなくなります。こんな山奥に、この時間に、よくも集まるものだと思しました。そして、こんなところに診療所を作る決心をされた中村先生の先見の明に感服します。一回行くだけでも私のように一大決心がいるのに物資の補給やスタッフの補充など今後長く続けていく上で大変なことです。車の損傷もむべなるかなです。また、それにしがったJAMSスタッフにも感心します。

一口に一ヶ月勤務といっても周囲は谷川のせせらぎと石の山のみ。聞こえるのはにわとりと犬の鳴き声。日中は診療で多忙でも六時

になれば真つ暗闇の世界。あかりは石油ランプのみ。水は二百メートル歩いて石油缶で運んでくる。風呂などはなく水で体を洗う。こんな生活を一ヶ月さぞ辛かったらうと慰労の念にかられます。それでも彼等は明るく楽しそうでした。



完成したダラエ・ヌール診療所

□診療を見学

この日は急用で二号車が出発まじかに北に向かったので一号車の我々は待機となり、診療を見学することができました。

その診療たるや、診察室、検査室、薬局とも薄暗いため撮影が不可能なのです。このようなかでの活動を日本の皆さんはどのように理解してくださるでしょうか。アジアの一角で行われているこのような現実には比べると物の豊富な日本が天国のように思われます。長い戦乱で心身ともに疲れはてたこの地の人々のために何かをしてあげたいとの気持ちで一杯になりました。そして、この診療所での活動を継続していくためにも、ペシャワール会の支援体制の充実を痛感し、なおいつその努力を決意しました。

帰りにまたダラエヌールで一泊し、再度の来訪をスタッフが喜んでくれました。夜中にトイレに起きると屋根の上に銃を抱いたチョキダールが不寝番で警備をしているのに驚かされました。朝、洗面にいくとその彼がお湯を準備してくれましたが、一体、何時寝るのかと不思議に思いました。

□故郷に帰りつけぬ人々

帰りは一路ジャラバードまで走り、市内のレストランで昼食です。アフガンに入るときは検問のきついカイバル峠を通りましたが帰りは迂回してクナールを越えて戻りました。

帰りも、途中いたる所に赤錆た戦車、軍用車の残骸が多く見られます。広い丘陵地帯には今もなお、国境は越えたものの故郷に帰り着けずにテント村で生活している人達が何千人という光景を目の当たりにしました。おそらくカブールあたりの住民だろうという話です。カブールでは今も激しい戦闘が続き昨日一月一日にも再度激しい戦闘が二日間あったそうです。早く、一日でも早く平和の日がくることを祈ってやみません。同じ国民どうし、話し合いで和解できるよう祈ります。

JAMSには三十日の十六時に、無事帰り着きました。

この四日間を言葉の不自由な私を支え、楽しくサポートしてくれたスタッフの皆に感謝です。今回の訪問では楽しいうきうきした気持ちだけではなく、暗く重い現地の実情も私の心の中に残りました。これは、はたからとやかく言うものでもなく現地の当事者の努力のみが解決していくことだと思われるので我々ができるだけの支援と、陰ながら祈るのみだと思いました。

このたびのアフガン行きに際し、ドクターシャワリの決断とご支援、同行のスタッフの協力に感謝すると同時に私をワーカーとしてJAMSに派遣の機会を与えてくださったペシャワール会の皆様に心より感謝申し上げます。

ヌーリースタンの溪谷(1)

「インダルの園」

JAMS顧問医師

中村 哲

*樹木所有

ワマ溪谷の流れから高度更に約三〇〇メートル上方に、緑で埋まる果樹園がそり立つ。聳え立つ鋭い岩塊に取り囲まれた小さな盆地で、その長さ四一五キロメートル、端から端まで歩くのに約三時間はたつぷりかかる。はるか遠方から眺めても、この果樹の集落だけがまるでオアシスのように、ぽっかりと際立っている。これを人々は「インダルの園」と呼ぶ。果樹園といっても、肥しや殺虫剤はおろか、一切人の手を入れていない自然の森で、クルミ、ブドウ、ザクロ、マルカナイ（小さなナツメの一種）の巨木で埋められ、数千年もの間守られているという。

果物の品質はよく、ちょうどブドウ・ザクロ・クルミの季節で、いずれも当然新鮮で味がよい。滞在中は毎晩、ウマの餌ように沢山食べさせられた。ザクロは甘くて美しく、種もそのまま食べられる。果樹は一本一本、一々所有者が決まっており、代々受け継がれる。土地所有に類似した「樹木所有」であるが、

面の所有ではなく、各人の所有樹は全体に散在して入り組んでいる。しかし、収穫に関しては厳格な規律があり、ワマの村民はこれを誇りにしている。アフガン戦争前には、興味をもった人類学者などが、たまに調査に訪れることもあったらしい。

収穫開始時期は十月頃で、ちょうど我々が訪れた頃であった。果実が熟して、村人たちの主食であるトウモロコシの刈り入れが一旦つくころ、合意で「解禁」が決定される。それまでは公の通知がない限り、誰も足を踏み入れることはできない。解禁の知らせは、総ての所有者に届けられる。希に所有者がペシヤワールやカブール、はたまたロンドンやニューヨークの遠隔地に住んでいても、知らせが行く。余りに遠隔地の場合は係累の者が代わって収穫し、それを出荷して得た利益の分け前はきちんと彼の所に届ける。

夫々の果樹の所有者は、自分の所有する木だけから収穫する。下に落ちた実は、自分の果樹からのものだけを拾う。もし隣の他人の木の実が自分の木の下にころがっていると、

投げて元に戻してやらねばならない。樹木は勿論、そのつける実も、他人のものと自分のものとは、色や形、大きさなどで容易に見分けがつくという。

おそらくこの掟が、豊かな果樹園の維持を数千年間可能にできたのだろう。驚嘆すべき自然との共存の知恵である。

*「インダル」の名の由来

ところで、この「インダル」という名前に関して、古い言い伝えが残っている。インダルとは大昔、「イスラムの来る前のずーっとずーっと昔」、この土地の或る支配者の名であったという。（前インド首相にインデラ・ガンディという女性がいたが、「インデラ」は女性形名詞である。男性形が「インデル」であるらしいことは容易に想像がつく。恐らくインド系の人物で、ヌーリースタン語がインド系のウルドゥ語やパンジャービー語に似た語感があるのも、これを裏付けている。また、アフガニスタンを覆う大山脈、「ヒンズークツシュ」は、ペルシャ語で「インド人殺し」という意味で、古代以後、当地からインド系住民が駆逐されたことを物語っている。）

言い伝えは次のような話である。

——昔々、このワマにはインダルという領主がいました。この頃からワマは谷の中心で、何千人もの人々が住まい、平和に暮らしていました。しかし、溪谷の急流は夏になると雪解けで水かさが増し、村人たちは自由に対岸

に行くことができません。

このワマの北側の丘に、まるで水瓶を逆さにしたような、長い大きな岩が聳えています。インダルは、この岩を引きずり下ろして、川に橋を架けようと思いました。

さて、彼の息子で、立派な若者がいました。この息子は隣の谷に住んでいたのですが、呼びだされてワマにやって来ました。若者は長旅でひどく喉が渇いていたので、父親のインダルに飲み物を乞いました。

インダルは、自分の息子の賢さを試そうとして言いました。

「家の中に暖かいミルクの入った壺が置いてある。それを飲みなさい。ただし、カイマー（ミルクの上に張る薄い膜のこと）を破らずに飲みなさい。」

若者は家に入って途方に暮れました。おなかが減って喉がからからなのに、ミルクの上澄みにあるカイマーを取らずには飲めません。これを見ていたダイニツクという、インダルに仕える女が可哀想に思って、一計を案じて若者に耳打ちしました。

「小麦のわらしべを取り、それを静かに中に入れて吸ってごらん。」

若者は言われた通りにして、小麦の茎のストローで、ミルクの表面を少しも傷めずにすっかり飲むことができました。壺は、底にカイマーが張り付いたまま、すっかり空になりました。

さて、インダルがやってきて、これを見て

驚きました。そして、驚きは不安に変わってゆきました。——これは賢い奴だ。しかし、この賢さがやがて自分の地位を脅かし、ついには自分にとって代わってこの地の支配者になるかもしれない。

そこでインダルは、息子を殺そうとしました。息子は上の方の、今の「インダルの園」の森に逃げ込みました。インダルはダイニツクに、捕らえることを命じました。ダイニツクは、命ぜられるままこの息子をつかまえてインダルに引き渡し、彼は殺されました。

ところが、己が子を殺したインダルは、逆の後悔し始めました。最愛の息子を失った悲しみと、自分のしでかした罪にさいなまれたのです。そこでインダルは、ダイニツクに迫って言いました。

「あの時、自分は正気ではなかった。どうして私を止めなかったのか。おまえが息子を捕まえなければ、こんなことにならなかったろうに。」

インダルは怒りをダイニツクに向け、殺しました。その後、インダルは深い悲しみに打ち沈み、ワマの地を去ってゆきました。それから彼がどこに行ったのか、どうしたのか、誰も知らないということです。

何千年も前の、昔々のお話です。しかし、石の橋はかけられず、今もそのまま山の頂に残っています。果樹の森も、ずっとその頃から変わらずに毎年実をつけています。

＊諸説紛々

——このインダルの悩みは、旧約聖書に出てくるイスラエルのサウル王が、賢くて強いダビデを恐れて嫉妬し、殺そうとした話によく似ている。しかし、どうしても解せないのは、ダイニツクまでがなぜ殺されたかである。「そりゃ、ひどい話だ。そのダイニツクという女が浮かばれないではないか」と私が尋ねると、あるJAMSのスタッフがあっさり答えた。

「でも、本当に良いつれあいなら、事情を見極めて、もう少し賢くふるまえた筈です。彼女にも責任はありますよ。案外下心があったんじゃないですか。」

有り得ることである。このことは、女たちが表面家畜のように扱われながらも、実は内助の功を期待され、家の中かなりの「実権」をふるい得ることを暗示している。その後、スタッフの間では諸説紛々、若いダイニツクが本当は年の近い主の息子に懸想して拒まれ、その恨みで主の命令を実行したのかも知れぬ。或いは主の最愛の息子を抹殺して、わが子を跡目相続につけようとの策だったのかも知れぬ。いやいや、時間つぶしにはよい話だった。ダイニツクについてはまるで謎のような話ではあるが、いずれにしても、女とは大昔から怖いものである。目のまうような荒々しい断崖と、ごうごうたる急流をはるか目下に眺めながら聞けば、話はずっと凄みを帯びて感ぜられるのだった。(つづく)

●事務局だより

*前号のこの欄で、未使用切手と書き損じのハガキの寄贈をお願いしました処、たくさんの方からお送りいただきました。ありがとうございます。引き続きお願いいたします。また、マラリア・キャンペーンで寄附いただいた方にご報告とお願いを出しました処、約三百人の方が、今後も会員として支援していただくことになりました。また会員にはならないが寄附は続けるという方も多数ありました。ありがとうございます。

*日本にいますと、現地プロジェクトが厳しい政治の海を漂う小舟のような存在であることを忘れがちです。私たちは「良心的な協力」をしているのだから、現地政府からも無条件に歓迎されていると考えがちですが、それはやはり日本のナイーブさといえます。バキスタン・アフガニスタンをめぐる政治状況を冷静に認識しながらプロジェクトを進めて行かねばと思います。

*これは蛇足ながら——たまにお尋ねがありますので記しておきます。中村先生の著作物の印税・マスコミ等の原稿料・出演料、講演会謝礼等は全て会の収入となり、現地のためにつかわれています。

〔〇ベ村から〕

※二年間の出稼ぎを終えて、この四月、やっと福岡に戻ってきました。早く前線復帰を願いつつも、③にとつて激動のこの二年をくぐり抜け逞しく成長した事務局の面々の活動ぶりがただ眩しく、私はまだ目を細めてウオッチング中といったところです。それにしても、事務局の皆さん、二年を経てこれ程までに私生活に変化を寄せつけないあなた方は（私たちは？）、やはりエライと言わなければならない。この忍耐力が、会の息の長い活動の原動力となっていたのですね。（か）

※暑中お見舞い申し上げます。さて、少々私的なことですが、中村先生や私の母校である福岡高校を紹介します。今、同窓生の会員は三百名以上、現役の高校生も古本市など開いて応援しています。毎年六月に行われる同窓会では、先生の同回生の方が会場を回り募金して下さり、今年も三十五万円いただきました。

「母校の卒業生がしようとなら応援しやらない」さすがわが母校を誇りに思っています。（ふ）
*毎週水曜日夜七時より例会 乞参加！

ダラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに—

中村哲 四六判上製三二六頁 定価二〇六〇円

ひとりの日本人医師が、現地との軋轢 日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何か、を根底的に問い直す渾身のメッセー

石風社

福岡市中央区大名一―一十五
電話 〇九二(七一四) 四八三八

ペシャワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 定価一八五四円

石風社 福岡市中央区大名一―一十五
電話 〇九二(七一四) 四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 定価一一〇〇円

筑摩書房

東京都台東区蔵前二―一六四
電話 〇三(五六八七) 二六七〇

会 則

① 本会の名称をペシャワール会とする。

② 本会は、中村哲医師のバキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。

⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。

⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。

⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE

(〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇―二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二一三七二) 内におく。